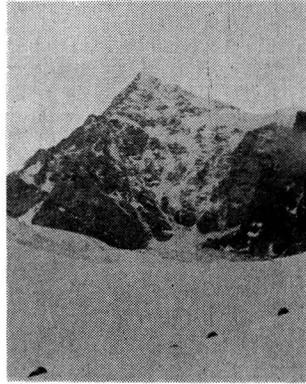


第2回 日印女子 ヒマラヤ登山隊 報告

須田 紀子



第3キャンプよりのカメット峰
(7756m)

念願の第二回日印の女子合同登山隊をみなさま方の暖かいご声援のもとに無事終えて七月末全員戻ってまいりました。現地から通信もせず、長い間のご無沙汰、心よりお詫び申し上げます。

今回の目標の山はカメット峰でしたが、インド登山財団サリーン会長に、余裕があったら隣のアビ・ガミン峰(七三五メートル)も、またもしカメットが無理だったらアビ・ガミン峰だけでも登っていら

らっしゃいと、ニューデリーを五月十日送り出されました。隊長兼医者ミーナ・アグラワルは第一回ときのドクター。不思議なもので一度一緒に山に行っているだけで遠くにはなれているにもかかわらず気が伝わり大変うれしく感じました。

六月二日全隊員が第三キャンプ(五四五〇メートル)に集まりました。いよいよ頂上をめざしてこれからという気がわきあがって

きました。ここから眺めるカメットは東カメット氷河の上に美しくピラミッドのようにそびえ、朝夕に陽の光に輝いて、私達を見おろしていました。

が第四に入り、第四キャンプの二名が第五に入りました。三名の隊員と二名のシェルパが第六最終キャンプをミーズコルの上に設営しました。

この登山隊派遣に際し、ご心配、そしてご援助をいただきました会員の皆さま、日印の関係者のみなさまに深い感謝を申し上げます。



昭和 51年 (1976年)
10月号 (No. 376)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)
定価一部 150円

目次

- 第2回日印女子ヒマラヤ登山隊報告 (須田紀子)(1)
- ゴットフリートとの再会 (麻生武治)(2)
- 明治初期の日本における外国人の登山活動について(1) (水野 勉)(4)
- 追悼 名誉会員藤島敏夫氏(4)
- 藤島敏男君の長逝を悼む (岩永信雄) 藤島さんを偲んで (島田 巽)(10)
- 自然保護情報(11)
- オリンピックのゴールドメダル(11)
- 一登山とオリンピック補遺(6)
- 会員通信・委員会通信(6)
- バミールの麓から (原 真) 上高地山研のことども 現地小集会 白山登山 お願いとお知らせ(9),(11)
- 会務報告・ルーム日誌(10)
- カット/谷アユ子

山をきねて 山は持ち帰る

ゴットフリートとの再会

麻生 武 治

厳冬のオスローから想い出のツェルマツトへ

住みなれた日本とは緯度のちがう北歐(冬の旅をするのだから、寒さは覚悟していたものの、来る日も明ける日も薄墨の空と灰色の大気に包まれた二月中旬のオスローには参った。半世紀の交友でかつてはホルメンコツレン(ホルメンの丘)と一緒に競技した旧友の誘いもあって、オスローから鉄道かバスで三、四時間で行ける田舎への旅にも心はひかれたが、なにごんにも寄る年波のせいもあって厳冬のノルウェーの雰囲気は我慢出来ない。思いついたら矢も楯もたまらず航空会社のカウンターに馳せつけて切符の書替えを済ませると、人の心はけちなもので北の国にも未練は残る。でもオスローのフォルネブー空港を搭乗のスィスエアー機が離陸したときにはほっとして気も晴ればれた。

ギョーテさんならずとも南の空に憧憬れるのは人間の習性じゃなかるうか。途中デンマークのカストロップ空港で小一時間休憩したのが、朝八時にオスローをたつて正午には明るい太陽が湖水に照返すジュネーヴに着いた。予約してあ

ったホテル、デュ・ローヌも上々のはず、離座敷の一人部屋で一泊邦価一万二千円だからいいのは当り前ともいえる。ホテルへ着くなりフロントでツェルマツトの宿の予約をたのんだ。受付主任がツェルマツト出身とは後でわかったのだが、真に運がよくツェルマツトの町の中心である教会の広場を墓地の方へ左折し、橋を渡った袂にあるホテル・プリストルは中級だが居心地は実によかった。窓外にはマッターホルンを仰がれる日当りのいいバルコニーにデッキ椅子と毛布まで用意してあって、シャワーつき一人部屋朝晩食事がついて七十五スイスフラン(邦価八千七百七十五円)は世界中が物価高の今日決して高くない。

想えばちょうど五十年前の同じ時期にモンテローザ(四六三八メートル)のスキー登山に心をひかれ、正月中旬からまる一カ月スキー練習にあけ暮れたグリーンデルワルトから移動してツェルマツトに向った。当時ツェルマツトは徒歩以外冬の交通は全く途絶えているので、ローヌ溪谷の寒村ヴィスプで一泊、翌朝は暗いうちに前夜頼んであった馬車に便乗したのは松

方三郎、松本重治両君と私の三人で、車は平坦な道を河に沿って十キロを一時間足らずでシュタルデンの村にきた。此処で鞍は二分し、東へザースの谷が折れる。シュタルデンからは坂路となり馬車を乗って、これから谿奥のツェルマツトまで三五キロの雪路を歩いたものだ。

いくら企業優先時代かどうかは別としても、今はあんまり乗すぎの軌道は狭軌だが暖房のきいた車室は明るく清潔で乗心地もよく、またたく間にサン・ニクラウスをすぎラングダに來ると谿ははやや展げ、行手にクライン・マッターホルンの岩のかたまりと氷壁のブライトホルンが南の空を区ぎっている。ウィリッシュのピッケル工房のあるテッシュに來ると鉄路の左手に広く駐車場がとってある。自動車はツェルマツト地区には入れないとの鉄路を守りつづけているのは立派だ。ただでさえ狭い国土の日本なぞ国立公園は看板倒れか。排気ガスを撤さちらす車の締出だけではない往来や公開の場での喫煙の禁止と吸ガラの投棄など厳罰で臨む以外救いの道はない。

公衆道徳―彼我の違ひ

山ではないが英京ロンドンのも真中に広大な公園地域ケンジントン庭園、ハイドパーク、グリーンパークとひろがっている中のあちこちに制札が立っている。Littering

即ちちらかすのは厳禁でこれを犯す者には一万ポンドの罰金を科すとの。紳士淑女の国エリザベトさんのお膝元でさえ十萬円の罰金刑で取締らなければならぬのかとなさげなくも思うが、さすがに空缶はもとより吸ガラ一つ落ちていない。日常ダラシない奴が山にでかけるから汚れるのは当り前。百年河清を待つが如し、元來必需品でないタバコは嗜好品であつてみれば、自らマナーがあるはずだ。時も処もおかまいなくプカプカやるのは未開人に等しい。ヨーロッパの鉄道では今世紀の初めから国営はもとより私鉄にも車室別に禁煙と喫煙室の掟が厳守されている。先進国気取りの日本で何故実施出来ぬのか、折に触れ機会ある毎に原稿にしたこともあるがいままでどころ没にされた経験がある。

それにしてもスイスの山村にも家の数はふえた。スキー季節とあつてゴルナーグラート行登山鉄道はじめゴンドラ索道もリフトも満員、したがって滑るグレンデの賑わしさ、飯時のレストランの混みは、あにツェルマツトのみならずサンモリッツもダボースも、はたグリーンデルワルトも同様である。だがそれら公の場での人々、言うならば庶民の振舞と躰がどこぞの国とは大違ひである。さもあらばあれ、私をはじめ冬のツェルマツトに來た頃はシュタルデンから

終日とほと歩かなければならぬのだから土地子の往き來もまるでなし。ましてやよそ者なぞ超山好きでもない限り訪れない。宿屋も全部閉店とあつて山案内のアレキサンダー・グラーツェンの家に泊めてもらひ古めかしい部屋の造作と妻君の山家料理もうれしく甘党的の松方君は泡立クリーム付メラングのデザートを愉しんでいた。

われわれ三人でツェルマツトに來ていることを知った鹿子木、渡辺(兵力君のおとうさん)の両先輩もグリーンデルワルトから馳せ参じ外界との音信さえ途絶えがちな冬籠りの山村に東洋の珍客來が村人の話題になるほどの狭いちいさな谷底の部落だった。

若人を魅了せずにはおかぬスキー故に真冬でも賑つてる今のツェルマツトではあるが、当今ここに來る人々には滑りにのみ心を奪われ周辺の山々には関心が全くなきが如く、またあつても真に薄い。彼等にとつてはミシャヤルもワイスホルンも無きに等しい。あんなギョーギョーしく宇宙人のような不趣味な格好の男女の群とゴンドラや空中ケーブルには乗るのも不愉快だが、アザラシ皮をたよりに自力で登つた五十年前の体力も氣力も失せた今の私は、隅っこに小さくなつてゴルナーグラートやシュワルツゼーに運ばれて三千メートルの高所で展望を愉しむだけ。

ゴットフリートを訪ねて

里に下ってければウィンパーのリリーフがあつて十九世紀この界隈の峰々の初登攀華かなりし頃、英国山岳人の常宿モンテ・ローザの一室ウィンパー・シエルトゥベで地元ワリス地方のチーズを肴に地酒を汲むのもまた一興であつた。街では凍った路面に脚をとられながら行きあひの古老にペレン・ゴットフリートのことを聞いてみた。古い山案内で私をダン・デランやマッターホルンに案内した男、当年八十五歳で村の上手に住んでる由。早速尋ねてみたら、玄關に現れたのは妻君で、最初は怪訝顔だったが、一九二三年夏からはじまったゴットフリートとのつき合いを話したら納得して居間に通した。それこそ何十年來の対面に非常に喜んでくれ、文字通り懐旧談はつきない。おつむがぼけていないのに感服した。彼の山案内手帖には各務良幸君と二人で夜半十二時にションブールの山小屋を出てダン・デランを縦走、マッターホルンを越して夕方六時にはシエルトゥベに降り、ツェルマットには八時すぎ帰着したとか、モン・ブラン群峰ではモン・モディを伊太利側から直登したり、当時としての大記録を残している。

余談のようにだが先年私がクールマイニールに遊んで先ず訪れたのは、

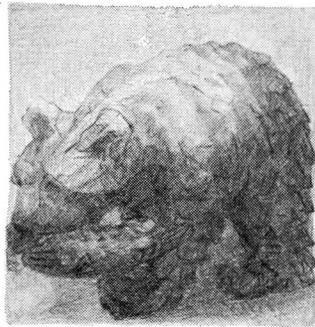
は、アブルツ侯爵の名をとった山岳博物館であつた。その管理をしていたのが土地っ子の山案内ドリヴェルで、彼はお前日本人か、ではカガミを知っているかときた。

一体全体クールマイニールと各務と何の関係があるのかとききたしたら、ルート・カガミの話になつて、その登攀は最初フランク・スマイスさんが各務をさそつて二人で試登を予定していたのが、スマイスが英本國から仕事で呼びかえされ、急にペレン・ゴットフリートがツェルマットから馳せ参じたということだ。すべては過ぎた歴史のヒトコマである。

貴重な史料をもつツェルマットの山岳博物館

山岳博物館はツェルマットにもある。そもそものがこの山里の今日の観光的賑いの基礎を築いたのはザイラーさんである。最初は八人しか泊れない旅籠屋だったホテル・ザイラーがアルプス登山の黎明からその黄金時代に山に関する資料の収集を同ホテル別館に展示したのがはじまりである。

第二次世界大戦をはさんで相当荒れはてていた館を改築し、資料も整備し、ツェルマット山岳協会 Alpinvereingung の管理運営の下に面目一新再開したのが一九五八年のことである。この谿と周囲の山に関する歴史、動植物誌が資料の主なもので、歴史上では一七八六年ソーシユール氏のクライン・マッターホルン初登頂に溯る。ジェオフレイ・ウィンスロップ・ヤング氏がかの有名なガイド、ヨーゼフ・クヌーベルを連れて一九〇六年ブライトホルンのヤング尾根の初登攀の記述や写真。例のワイスホルンの初登頂者ティンダル博士の使ったピッケルと天幕や、彼自身の当時の登攀記録等と肖像、油絵といった遺品、次に劇的な墜死を遂げたダ



グラス卿がそれ以前オーバーガールベルホルンの初登頂をとげて下山した時泊ったホテル・モンテローザの宿帖に記した署名といったものもある。

この展示室のクライマックスは何といつてもマッターホルンに関する展示品の数々である。それらをいちいちここに記述はしないが、一八六五年七月十四日の初登頂から百年に当る一九六五年の夏にこの部分は完璧に整備されたのである。

ウィンパーさんの使ったアイスピッケルは、娘である Mrs. Ethel Bancro の寄贈である。このピッケルにはウィンパー自身が刻みつけた「私はこのピッケルを使うと必ず成功した」との言葉がある。さて誰もが知つて居る初登頂後に墜落した連中の遺品で後日マッターホルン氷河上で見出されたダグラス卿の靴の片方とか、耶穌教聖職に就いたアドソンの祈祷日記、或いはクロツ案内人の帽子とロザリオや、ハドリーの靴と衣服の切れはし、それにタウグワルダートとダグラスの間で切れたロープの一部が壁にぶら下げてあるのは最もたましい。次にアルペンの単独登攀者として名を残した独乙の若者ガオルグ・ウインクラが一八八八年八月十五日、ワイスホルンの西壁登攀を試みて行方不明になり、一九五六年七月二十九日西壁直下の氷河から遺骸がみつかり、ツィナルの村で墓地に葬られた。

そのウインクラの遺物がこの博物館へ実弟から寄贈され特別の飾ケースに保存されている。さらにカメット峰の初登頂をはじめヒマラヤで雄名を馳せたフランク・スマイスはこの界限の山々に多くの足跡をとどめているので、その帽子とシュタイクアイゼンが保存してある。また、二階の一隅はウィンパー初登頂の伴をしたタウグワルダール親子が住んでいた家の台所と寝室で十七世紀から伝わった

屋内の調度がそのままの形で残されているのは面白い。こんどのツェルマット行で感銘を深くしたのは、勿論老ガイドのゴットフリート・ペレンとの再会であり、次にマッターホルンが睨みをきかせて居るこの谿はツェルマットの村から輿は排気ガスを撒きちらす不埒な車が締出されている心地よさと、このミュゼウムの存在であつた。夕陽がミシャヤル群峰のテッシュホルンの頭に映るのを厭かず眺めていると、背後の教会堂から夕べの祈りの鐘がきこえてゆく。私はこのままこの世から消えてゆけたら一番幸福なのではなからうか。ちなみに本会々員馬場忠三郎さんの提唱で今度信州菅平がスキー地として誕生五十周年を迎えた記念行事にと、その道では百年先輩のスイスのダボースと姉妹都市が成立し、彼地で町長と会談するなぞ嬉しい数々の想い出を感じ謝している。

姉妹都市について一言

ここでもう一言申しあげたいのは、姉妹都市に關してであるが、私が問題にするのは、東京だ大阪だ、相手はニューヨークとかロンドンとかいった大都市の場合ではなく、野沢とアルベルグのザンクト・アントーンとか、信州安曇村とグリンデルワルトといった、山やスキーにつながりを持つ町村同志の縁組について言いたい。も

っと端的に言えば名目とか肩書を振りかざしたがる日本人の悪い習癖がむき出しになって、先方からは馬鹿にされ、軽蔑されるのにお気づきないのか。

物見遊山の観光団体のおでかけには姉妹都市の必要もなく、そんなところの群小旅行代理店がやっつけてのける代物である。それに反し、ダボース町長ヨストさんの見

●追悼 名誉会員 藤島敏男氏

九月九日午後三時、胃癌のため国立ガンセンターで逝去、享年八十歳。明治二十九年七月十二日誕生。大正八年十一月日本山岳会入会(会員番号七〇番)。大正十二年幹事、爾後多年に亘り理事、評議員、副会長を歴任。山日記の創刊、旧虎ノ門ライブラリーの創設、

『山岳』編集、戦後お茶の水のルーム再建等、多年本会の重要な会務に尽力され、本会が好いクラブとして永続することを終始念願とした。昭和四十年十月名誉会員に推挙された。

大正八年皇海山、大正九年仙ノ倉山、谷川岳及び利根水源山脈、大正十四年守門、浅草、御神楽岳等の登山は、この方面の開拓的登山として注目される。昭和十三年間滞欧中にスイス・アルプスに登り、更に病にたおれる迄六十年の長きに亘って国内の山々に登り、昭和四十四年、七十三歳の時ニュージーランドに遊び氷河の山

解を披露すると、単なる名目なんて意味ない、もう Wesenlich に物事を考えたい、だから相互に文化的な交流をしよう、ついで今年九月二十二日から二十五日までスキー傷害対策骨折治療をテーマとするシンポジウムを開くから日本からも外科医の方々、その道の専門家の参加を期待していると強調していた。

々に登る等、豊富な山歴の持主であった。

入会以来会報、『山岳』への寄稿は絶えることなく続き、それらの随想、紀行、書評、人の憶い出、山の便り等をあつめて昭和四十五年五月『山に忘れたパイプ』を上梓したが、その増補第二版を本年四月に刊行したばかりであった。葬儀は九月十一日十二時から増上寺で行われ、名誉会員榎有恒氏が弔辞を読まれ、今西会長はじめ多数の会員が参列した。本会はこのに深甚なる哀悼の意を表する。(望月達夫)

藤島敏男君の長逝を悼む

岩 永 信 雄

昭和五十一年九月十日付の新聞紙上に山岳会名誉会員藤島敏男君が胃ガンのため、九日、国立ガンセンターにて長逝の報を見て驚き

最近はずっかりヒマラヤ・中央アジアに心を奪われてしまっていたが、長い間気にかかっていた明治初期の登山のことを調べる気が起きた。というのも、黒岩健氏の『登山の黎明』の影響かもしれない。日本山岳会以前の登山というテーマはぼくが久しく抱いているものである。しかし、どこからどう手を着けていいかわからないまま、現在までできてしまった。そして、このような状態はこのままずっとつづくかもしれない。怠け者のぼくとしては、どなたかの研究を期待しているだけになるかもしれない。

そうはいっても手の着けられるものからでもノートをとっていこうと思ひ立ち、文献のある外国人の登山活動を追ってみようと思ったのである。はじめに、明治元年から十三年までを調べることにした。すなわち一八六八年―一八八〇年までである。というのも、一八八一年には、かの有名な "Handbook for Travellers in central and northern Japan" が発行され、それまでの外国人による登山あるいは旅行結果の集積がなされたとみられるからである。この期間についてはすでに小林義正氏(『山と書物』)および山崎安治氏(『日本登山史』)が調査され、ある程度はわかっている。特に山崎氏は小林氏の調査を更に進めたもので、相当の資料にあたられたことと思う。ぼくはまた山崎氏の肩ののって少しでも上へのぼっていくつもりである。

日本の山で目立つのは富士山である。外国人がまず登ったのが富士山であるのは当然であろう。一八六八年七月にはアーネスト・サトウが登っている。一八七一年七月には、ジョン・レディー・ブラックが二人のイギリス人と登っている。また、このブラックの記事によると、この三年間にたくさん外国人が登っており、ペイヤード尉はその四月に登っているという。雪の富士山登山の最初である(『日本登山史』に於て)。この頃のことにはよくわかっていない。一八七二年になると、名前にはわからないが横浜在住の英国人が三人で富士に登っている。そのうちの一人は女性で、九月二十七日に登ったが、二日前に降った雪のため、頂上へ五〇〇フィートぐらいのところまで雪におおわれていたので苦労した(Globus vol. 23 p. 47 "Auf den Gipfel des Fuji-yama" 1873)。同年八月五日には、J. H. グビンスが登っている(Proceedings of the Royal Geographical Society vol. 17 p. 78-80 "Ascent of a Fujiyama" 1873-74)。一八七三年八月には、エドワード・ワレン・クラークがジェームス・バラートともに登っている。一八七四年には、有名なJ・ラインが九月に登っている(Petermann's Geographische Mittheilungen vol. 25 p. 365-376 "Der Fuji no yama und seine Besteigung" 1879)。しかし、特筆すべきは、この年の五月に行われたアーサー・F・ジェフリーズの登山でこれはロープとピッケルを使用している積雪期登山記録である。このことは『日本登山史』でも詳しく書かれていたが、そこでは一八七五年五月となっているが、正しくは一八七四年であり、発表されたのは『ジオグラフィカル・ジャーナル』第十九巻となっているが、これは Proceedings of the Royal Geographical Society vol. 19 (Old series) である。やはり、この年の九月

明治初期の日本における外国人の登山活動について (1)

水 野 勉

日に登ったが、二日前に降った雪のため、頂上へ五〇〇フィートぐらいのところまで雪におおわれていたので苦労した(Globus vol. 23 p. 47 "Auf den Gipfel des Fuji-yama" 1873)。同年八月五日には、J. H. グビンスが登っている(Proceedings of the Royal Geographical Society vol. 17 p. 78-80 "Ascent of a Fujiyama" 1873-74)。一八七三年八月には、エドワード・ワレン・クラークがジェームス・バラートともに登っている。一八七四年には、有名なJ・ラインが九月に登っている(Petermann's Geographische Mittheilungen vol. 25 p. 365-376 "Der Fuji no yama und seine Besteigung" 1879)。しかし、特筆すべきは、この年の五月に行われたアーサー・F・ジェフリーズの登山でこれはロープとピッケルを使用している積雪期登山記録である。このことは『日本登山史』でも詳しく書かれていたが、そこでは一八七五年五月となっているが、正しくは一八七四年であり、発表されたのは『ジオグラフィカル・ジャーナル』第十九巻となっているが、これは Proceedings of the Royal Geographical Society vol. 19 (Old series) である。やはり、この年の九月

いった次第で、今後あの元氣な姿に永久に接することが出来ず、哀悼に堪えず御冥福を祈る次第である。先に六月に日高信六郎氏を失い、またまた同氏の逝去にて山岳会にてもだんだん長老格を失うことは非常の寂しさを感じる次第である。

君とは大正年代の学生時代より面識を得て日本山岳会員として現在にいたるまで会のために種々尽力せられ、頭脳明晰で、そのうえ筆まめに「山岳」誌上や「会報」にたびたび執筆せられ、斯界に貢献せられしこと、いまさら喋々を要することもない。

君とは大正年代より山岳会員としての交友であるが、山行を共にしたことはなかったが、大正十二年頃、鹿沢温泉に出かけたときには、たびたび同所で会合し共ども山を論じ、以後山岳会の集會等にて快談し、最近では山岳会七十年記念講演会が九段会館にてもよおされたときが最後であった。

君は暁星中学より旧制一高仏法科に入学せられて後、帝大仏法科を卒業後ただちに日本銀行に就職せられ現今に至ったのであるが、その間寸暇を利用して内外国の山岳に登山を楽しまれ、徹底的に山を跋涉、最近にては夏期を除いては毎月一度は静かなる登山を試みて居られたのである。

君は大正年代、木暮理太郎氏と同行して利根川源流地を旅行せら

れ、木暮氏が山岳会小集會にて東京赤坂清水谷公園内皆香園にての旅行談にては興味深く印象を深くした。

君は性爛漫にて真正直に人生を送られ、我意に充たざる事には他人と妥協するような事は一切なかった。日銀入社当時から銀行マンでありながら年初一月四日の御用始めには出社したことがないと聞いて居た。そして他の友人等も藤島は特別扱いにされて許されて居たのである。

又、君は山の写真に早くから心がけられ、君自身他人のうらやむ世界最高級のカメラを愛用せられて見事な山岳写真を見せて戴き楽しんでたものである。

藤島さんを偲んで

島田 巽

九月三日、病室に入ると藤島大人は仰臥のまま、愛用のパイプで紫煙をくゆらしていた。これはいいなと思つたのだが、その六日あといに藤島さんは旅立ってしまった。残された空白をまえにして、寂寥をひしひしと感じる。

藤島さんという、あの齒に衣をさせない単刀直入の舌鋒を思い浮べる人たちが多いにちがいない

二十五日にアルフレッド・ホネットが登つてゐる (Globus vol. 37 p. 274-278 "Bestigung des Fuzi yama" 1880)。このときは雪に苦しめられた気配はない。一八八〇年までのいろいろな雑誌類をみているが、一八七五年以後になるとあまり載っていない。たぶん、その頃になると富士山に登ることなどは珍しくなくなつたのだらうと思つる。むしろ登山者は増加したと思われ

る。ぼくらの興味はむしろ富士山をはなれた他の山にあるのであるが、これらの文献はどうもみつからない。アトキンソンが一八七九年に八ヶ岳、白山、立山などに登つた記録とか、パークスとアーネスト・サトウが一八七八年に針ノ木峠に登つた記録などは知られているが、ガウランドが槍ヶ岳に登つたとされているのに、その記録は未だに発見されていない。

R・G・ワトソンという人が興味ある記事を Journal of the

い。いわばJACにとつて大久保彦左衛門といったイメージが藤島さんにはびたりと合つた。といつて、いわゆるその毒舌どんなに熱気を帯びても人を傷つけることがない。もとより陰湿でなく、カラリとしているから、みんな自分のことをやつつけられても、にこやかに聞いていられる。いわば「毒

Royal Geographical Society vol. 44p. 132-145 1874) に書つてゐる。題は Notes of a Journey in the Island of Yezo in 1873 and on the Progress of Geography in Japan とつてゐる。そこでは日本の有名な山々は次から次と登られてゐると書つてゐるのがある。これが書かれた一八七四年という時期を考へるとおおむべにきつめる。

The most famous mountains of the country have been, one after the other, ascended by our country men, the peak second in fame to Fuzi Yama alone having been last years climbed and measured by Mr. Lawrence. The result of many these expeditions are now chronicled in the "Journal of the Asiatic Society of Japan".

とワトソンは書いているが、この日本アジア協会誌にはアトキンソンがこの後に記録を載せるまでは、登山記録は一向に載つてゐない。

舌」でも一級品であつた。JACの会務のこと、遠征のことなどにも、故人は率直に独自の意見を述べてきた。いつも明快で堂々とした主張であつたが、その裏には会に対する人一倍もの愛情がひそんでいた。私欲的な発言でないだけに説得力もあつたわけだが、大正八年入会後、五十数年に



わたつて会のことを終始念頭から離さなかつたことが、発言の重みともなつていたのでと思う。私自身が藤島さんと松方、鳥山佛成両先輩の紹介で入会を許されたとき、会はちょうど創立二十五周年にあつてはいたが、当時、榎さん三十六歳、藤島さん三十四歳、松方さん三十一歳の壮年期にあつた。

JACとしてはじめてのルームを虎の門に開設したのも、この若い力を中心であったが、戦後、お茶の水に新たな本拠を再建するにあたって、募金の先頭に立ったのは松方さんや藤島さんたちだった。

会への貢献を挙げる時とかがないので、端的な一つの例をとると、筆まめな藤島さんは、その文章のほとんどを「山岳」と「会報」のために執筆したのであった。唯一の著書「山に忘れたパイプ」は菊判五七〇ページの大著だが、その大部分がJACのために書かれたものであることは、会への愛情なしにできることではない。それらの寄稿が紀行文、随想、書評、追憶、訳章など、いずれも推敲を重ねに重ねた文章で、追悼記事を書く折の事実調査など誠に丹念そのものであった。「日本山岳会創立当時の最長老」城数馬氏のことを執筆中の苦心ぶりを、私はじかに見ていて敬服したことがある。

これは「山岳」第六十二年に掲載されたが、藤島さん自身、「三年越しの稿を綴りおわって、私はホッとした気持である。……」と記しているのを見ても、力の入れ方かわかるのである。

『山に忘れたパイプ』の第二版は望月さんの援助で若溪堂から刊行されて、病床の藤島さんをこの上なく喜ばせたのはよかった。立派な限定版の出来栄えにも故人は大いに満足の様であったが、今

考えると、藤島さんはいかにも几帳面な人柄そのままに、この新しい第二版の完成をもって自らの山登りと人生に、立派なピリオドを打った形になる。

この本の巻末には例の詳しい「登山譜」が記されていることは周知の通りで、第一版では昭和四十四年まで二八ページにも及んでいたのが、第二版では更にその後五年間の登山を加えて六ページもふえた。そして、最終の一行には「日本山岳会々報『山』第三五六

パミールの麓から

原 真

高所順応と眼底出血
八一九七六・八・二〇

フォルタンベック氷河へきて15日が過ぎました。高所への順応はほぼ順調にいらしていますが、持ち時間はあと10日となりました。ここへ来てから四八〇〇メートル往復、ついで五〇〇〇メートルに泊して五九〇〇メートル往復、BCで2日休んで五〇〇〇(一泊)↓五九〇〇(一泊)↓六〇〇〇メートルまで行ってBCへ下山しました。コミュニティニズム峰へ登るためには六〇〇〇メートルに大きなプラトリーがあり、そこへC2をつくることとなります。全員がその高

号に「休山記」寄稿。」と記された。藤島さんは、この「休山記」が「還山記あるいは後山記、戻山記」となることを第二版の序文でひそかに念じていたのであったが、ついに「終山記」となってしまう。さぞかし無念であったことと思われるが、改めてその「登山譜」に見入りながら、なんと見事な、爽やかな、そして独自の道を歩き通した登山家の生涯であろうか、との感慨を深くせずにはいられない。

会員通信・委員会通信

合掌

さへ行って泊って来ました。私が日本を出るときから考えていた方法——たえまなく高度をあげながら必ずBCへ下って休養する——を採用しています。やはりこれがよいようで、特に短期の登山には最良と考えます。

いろいろな思い悩んだ末、隊を二つにわけて、コミュニティニズム峰とコルジュニフスカヤ峰と同時にやることにしました。時間的に二つを連続して全員でやるのは不可能だからです。とはいえ、誰もが最高峰にこだわるので、コルジュニフスカヤは私がやることにして、や

や順応のおくれ気味の隊員3人を連れてゆきます。コミュニティニズムのはうは神崎君を隊長、鶴田君を副隊長とし、12人が行くことにしました。パミールには七〇〇〇メートル峰が三つあり、そのうちレー

ニン峰はすでに日本人によって登られているので、残る二つを今年あげておこうという訳です。将来この決定を後悔することはないでしょう。

ソ連の受入れ体制についていえば、食事はやはり日本人の口にあわぬようで、食べられなくて困っている隊員もいます。困るのは行動食が充分にもらえないことです。食品リストがあつて申込むのですが、品切れが多くて困ってしまいます。カンヰメ、ビンヰメといった重いものばかりなのも困る。もし私がアメリカ製の乾燥食を持ってこなかつたら本当に困るところでした。燃料も欠乏しているので、ブタンガスなどを少し持つてくるべきでした。もっとも、こうした不都合は、我々がキャンプに入った最後の隊であつたために起つたことかもしれませぬ。

我々より先に入ったオーストリア隊がコミュニティニズム峰で事故を起し、1人死に3人凍傷にやられました。オーストリア隊は19人が二つに分れて行動していました。一つはヴォルフガング・アクストにひきいられ、他はマルクス・シュムックにひきいられています。シュムックというのは例のヘルマン・ブルとブロード・ピークに登つた男です。現在61歳。遭難したのはシュムックの隊で、六五〇〇メートルから一気に一〇〇〇メートルの高度差を登ろうとして、雪

目になった1人が頂上稜線から雪庇を踏みぬいて反対側へ墜落しました。これはまさにチョゴリザのヘルマン・ブルに似ていると、シュムック自身も言っていました。生存者は顔や手足を凍傷にやられ、ひどい状態で帰ってきました。ソ連側の登山隊が救援に向っています。

それにしても外国隊は高齢者が多いのに感心します。シュムックの61歳はともかくとして、平均40歳の隊はザラです。日本人の登山生命の短かさはむしろ、はずかしい。

医学上のことで困つたことがおこりました。困ると同時にこれは一大発見でもあります。六〇〇〇メートルの順応をすませて帰ってきた隊員の50%にかかる眼底出血がみられました。浅野医師も私もまさか、このような高率の発生は予想しませんでした。いまのところ視力障害をきたした例はありませんが、出血は若い新人に多いようで、私や神崎君や池沼君のような経験者には見られません。高所障害はいままで漠然と論じられてきましたが、今回日本隊としてはじめて徹底的にやつたところ、

このような意外な結果が出て驚いています。また、下山後、ひどい視力障害を訴える二人のロシア人を調べたところ、ひどい眼底出血が見られました。浅野医師は、下界の常識でいえば行動を中止させ

るのが当然だといえます。おそらくヒマラヤに行っている大半のチームに気づかぬうちに同じ現象がおこっているにちがいないと彼はいいいます。

今回の結果はおそらく登山界に大きな衝撃をもたらすにちがいないと思います。高所の体験はよほど慎重に行わなければならないことをキモに銘ずる必要があります。未経験者がいきなり六〇〇〇メートル以上に登ることは一般的によくはないといえるかもしれません。ともあれ、ヒマラヤ登山とは私が考えていた以上に危険なものであることは確かかなようです。

貧弱な日本人の体力

登山を終わってレーニン峰の基地アチタクシ谷へもどりました。明日撤収します。我々の成果は次のようでした。

- ①八月七日 コルジェニフスカヤ峰(七一〇五メートル)登頂 四人(全員)
- ②八月八日 コミュニズム峰(七四九五メートル)登頂 十人(十二人中)

フォルタンベック氷河(四〇〇〇メートル)へ入ってからそれぞれ一八日目、一九日目の登頂でした。

厳選したチームではなく、行きたい人間はみなつれてきた、玉石混交のチームとしては、またソビ

エト側の都合で他の隊より持ち時間が少なかった日本隊としては、登頂の率は意外に高かったといえるのではないのでしょうか。もっともそのために犠牲をはらった隊員もいます。コミュニティズムの隊長をやってくれた神崎君は、高山病で頭のおかしくなった隊員をおろすために自分の登頂をふいにししまいました。

コルジェニフスカヤ峰はいわゆる速攻をかけ、BC四〇〇〇を出発して第一日目四八〇〇、第二日目五二〇〇(雪のためあまり進めなかった)、第三日目六〇〇〇、第四日目一〇〇〇メートルを往復して登頂。

コミュニティズム峰はC1五二〇〇、C2五九〇〇、C3六〇〇〇、C4六四〇〇、C5六九〇〇登頂と、着実にテントをあげての成功でした。

今回の主眼は、二十日間という限られた時間内で七〇〇〇メートル峰に登れるかどうかという点にありました。私としては高所順応法に適切な定型のようなものを確立出来たと考えています。これはもちろん私の発明ではなく、世界のヒマラヤニストの間では常識になっていながら、日本の登山界ではいまだに常識にすらなっていないことであるにすぎません。

私の反省としては、今回の日本隊は弱いメンバーが混入していたのが問題だったように思います。

いやしくもパミールの七〇〇〇メートル峰へ来るからにはそれなりの実力のある者(少なくとも日本の冬山でがっちりきたえた者)であることが望ましい。それにもっと高所の経験者が欲しかった。そうはいっても、日本の現状では30歳過ぎて一線に立てる人物など、本来あまりいないのだから驚きではありません。オーストリア隊などは、30、40代が主力なのだから驚きました。経験豊かな連中は、本当に高山を楽しむ能力があると、つくづくうらやましく思ったものです。私も今度は相当に体力をきたえてきたつもりですが、オーストリアの年配の連中には舌をまきました。それに日本の若もの弱いにも腹をたてました。パミールへ来る日本の登山家がまず知らねばならぬのは、高山へ登るためには体力が必要だということです。

またソ連の登山家の強さには一驚したものです。あるソ連人は、トレニングに一週間三回走る。距離は15キロ、15キロ、30キロ、つまり一週に60キロ走るといわけです。オーストリア人にもソ連人にも、高山に登るためには基礎体力が絶対という信念があります。これなどは日本の若い登山家のおおいに学ぶべき点だと考えます。

これでパミールの日本人の登山はひとつのしめくりができました

いつてよいでしょうが、経験、年齢、体力いずれも貧弱であってはならないとだけは言っておきましよう。日本の指導員だのガイドだのといった連中も、せめてここで一度くらい洗礼を受けるといいでしょう。ネパールやカラコルムで

いい加減な自己満足の登山で口をにごしているより、ここへ来れば自分の力がはつきり比較されて誰の目にも明らかに、インチキはインチキとはつきりわかるのが何よりもよい点です。

(以上 田村俊介氏宛)

上高地「山研」のことども

上高地山岳研究所の利用については、未だ会員に周知徹底を欠いている向きもあるようであるが、故日高さんが会報『山』第三六二号に山研の前身である上高地山荘

の開設について詳細に書き残されている。当時会長であった日高さんは常々日本山岳会の登山界に於ける指導性や組織作り等に対する役割もさることながら、長い歴史と伝統に基づく日本山岳会のクラブ的な人間交流や雰囲気を非常に尊重されていた。その目的の一環として、たまたまい機会に信濃

売場ご案内

最新入荷の本

- ◆横浜霧凇山岳会25年史(同山岳会)4,000円
- ◆登山研究第2号(日本勤労者山岳連盟)500円
- ◆山菜と野草(山梨プランニングセンター)300円
- ◆白山紀行一近世の白山登山-(久保信一編)600円
- ◆インドヒマラヤ登山の手続き-インドヒマラヤ研究1-(1977年日本勤労者山岳連盟ナンドデヴィ登山実行委員会)2,200円
- ◆LATOK 7,108(1975登攀倶楽部登山隊)800円
- ◆CHOCK ART(小林義夫 中山芳郎)600円

特製本在庫ご案内(お求めは直接お茶の水店へ)

- ◆坂本直行画文集◀雪原の足あと▶25,000円
-原画 花の絵(淡彩2号)付-
- ◆南会津山の会編◀いろりばた▶8,500円
- ◆藤島敏男◀山に忘れたパイプ▶19,000円
- ◆日本山岳会東海支部編◀遙かなる未踏の尾根(マカルー)▶8,800円

茗溪堂

◀山の本の売場▶お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分~午後8時
土曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

支部から申し出があり、種々な困難はあったが、会員ならびに家族、縁者の利用のための拠点として、上高地山荘が開設の第一歩を踏み出したわけである。

開設当時から建物は老朽であり、また開設後間もなく水害による砂礫の流入等の事故もあって、応急修理のままに推移したもので、外部環境はこの上もなく良いのだが、内部環境は必ずしも良いとは言えなかった。

現在は名称も新しく「日本山岳会 上高地山岳研究所」として、内外の絶大な支援を得て、林和夫君を委員長とする建設委員会の努力によって、昭和四十八年十月に新築して再開設の運びに至った次第である。

現在のところは運営面において未だ本会としては経済的に重荷となっていて、一部からは貧乏人の別荘といった揶揄的な言もないではないが、会員に対するサービス施設として有効に利用して貰えるならば、開設目的の大半は達したものだと思ふ。独立採算で賄うまでには、天候に左右されることもあるが、もう一步というところである。

ともかく、運営委員や理解者の方々が、いろんな知恵を出し合っていて、これに取組んでいるが、さらに多くの会員の利用と運営に対する助言をいただきたい。
最近の上高地の一般宿泊施設は

建物の外観、内容共に充実はしてきたが、いわゆる世間並の観光地の様相を呈して、真の登山者を対象とするというわけにはいかなかった。

泊り合わせた人々が、山の雰囲気に溶け込んで語り合うという場がなくなってきたが、ここ山研ではお互いに何はなくとも、持寄りの餌をつきながら、山を語り、人生を語るにふさわしい場を提供していると思う。同じ会員とはいっても、未知だった人がたちまち百年の知己となるのも、こんな裸の付き合いから始まるのではないだろうか。

日高さんの遺志も引継ぎ、多数会員の協力を得て、そんな雰囲気のある山研に育てていきたいと念願している。

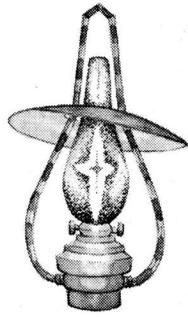
利用についてはある程度の規制もやむを得ない場合もあると思うのだが、個人の我が侷でない限り、研修や憩いの場として気軽に利用していただくように願いたいものである。

(山研運営委員会 折井)

現地小集会 白山登山

全国からお集まりいただくというのに、なんでよりもよって梅雨の最中にやらねばいかんのかと参加することに二の足を踏まれた方も数多かったと思う。しかし白

山のいちばん好い季節が六月であることは、前回の越後・石川・岐阜三支部懇親白山登山会で証明済みである。山麓のブナ・セン・カツラは新緑、山は鹿の子模様に残雪。そしてその上には群青の空。なんととっても山がもっても華やぐ時である。それに梅雨だといっても降りっぱなしということもあるまいと、あえてこの季節をえらんだ次第である。事実、今回も前回同様、梅雨の中休みに入って、全日程がまずは好天。これも会員諸賢の日頃の御精進の賜物というより他はない。



美濃馬場(長滝寺)を登山口として登拜されていた。その長滝寺(現在は神仏分離によって白山長滝神社)が国道脇にある。これから白山に登ろうというのに、素通りするわけにはいくまい。実際、盛時の頃の長滝寺は「神社仏閣三十余宇衆徒三百六十坊ヲ置キ(中略)参詣ノ男女踵ヲ接シテ集リ、長滝ノ法水遠近ニ溢レ石ニ花咲ク」勢いだったのである。宮司の若宮さんに特にお願ひして、宝物館と修古館を拝観させていただくことにした。泰澄画像をはじめ白山曼陀羅、当時の修験者が持ち歩いた大鎌、例の贋作事件の発端となった永仁の壺等々。皆さん、珍しかったせいも予定時間を大幅超過。この後、御母衣ダム、鳩ヶ谷の合掌村を見て、平瀬の「ふじや旅館」に止宿。夜は入山祝を兼ねて宴会。

六月十二日 岐阜羽鳥駅にお集まりいただく。バスは長良川沿いに北上。今回はバス代を少々値切ったせいもあって、例のウグイス嬢がついて来なかったもので、松井支部長、両高木委員で交互にご説明申し上げた。松井支部長は元来、流体力学が御専門、土地の歴史なんぞはトント御存知あるまいと思っていたら、どうしてどうして玄人ハダシである(失礼)。

御存知の通り、白山は中世、信仰の山だった。そして加賀馬場(白山寺)、越前馬場(平泉寺)、

のしんがり。途中、御婦人方はギョウジャンニクスの採集に忙しい。雪渓を二つ程横切って傾斜がなくなると室堂平。そこはハイマツと雪の世界。そうとう隊列が延びるものと覚悟していたが、一時間足らずのちがいで、まずはなにより。津田さんはじめ石川支部の皆さんにお出迎えいただく。今日のうちに頂上へ行くことにしているので、空身で往復。残念ながら六月の温気で展望の方はわずか。そこはバンザイと乾杯、そしておしゃべりで補うようお願いして無事の白山登頂を白山比咩神社にお礼申し上げた。夜は岐阜大山岳部と大垣山岳協会の若い人たちがあげてくれた牛肉とお酒でコンパ。

(以上、高木泰夫記)

六月十四日 夜半の星空も夜明けとともにガスにつつまれる。五時半、平瀬へ下られる岐阜支部の方のお見送りをいただき、本日の目的地、岩間温泉へと出発。ガスの中を水尻雪渓を登る。御前峰の肩を越え、大巳貴命(おおなむちのみこと)を祀り、その名のなまったといわれる大汝峰は視界の利かぬまま頂上を省略し、雨のパラつく中を先へ急ぐ。七倉山の山腹のハイマツの間を四塚山へ向う頃、ウソが出迎えてくれる。

北竜ヶ馬場あたりからガスも切れ、南は別山から北はこれから辿る岩間道まで一望出来るようになる。四塚山に三角点を探す人、カ

メラを出す人、急にムードも和やかとなる。

七倉山北側の雪渓を滑り抜け、前方に広がる清浄ヶ原の大斜面の上部まで下る。例年なら一面の大雪山なのだが、数日前の集中豪雨でどこも二メートル近く雪が融け、遠来の方々に素晴らしい景観をお見せ出来ず残念である。トガの間を抜け、清浄ヶ原ヒュッテ跡を横目に下ってゆくと、右手に地獄谷が荒れた様相を見せている。

見返坂で文字通り白山を振り返えり大汝や剣ヶ峰のスナップ。急な下りをタラの芽を探ったり、キヌガサソウをスナップしながら下ることしばし、やがて小椋平に近づくと、再びガスの中に入る。時にはほとんど視界も利かぬ濃いガスの中を黙々と進む。近くにある筈の避難小屋が妙に遠く感じられて待遠しくなる頃、小屋がぼんやりと姿を現わす。小屋に着く頃にはガスも上る。下りばかり続いたあとの、点々と池塘のちらばる小椋平は今日のコースの見どころの一つである。

小屋の前で一休み。もう少し時期が遅ければ、ハイマツの間にハクサンコザクラの咲き乱れる別天地である。ここから柔々新道を下る。ほとんど下り一方の長い道で、だんだん膝もガクガクとなり、小休止も多くなる。なるほどガクガク新道と読めないこともない。根曲竹の新芽を探る人、モタセの群

落もある。ウドはここまで下るともう大木が多い。本当に下りにも飽きた頃、丸石谷林道へ出る。ここから新岩間温泉は目の下、自然に足も速くなる。午後二時過ぎ山崎旅館着。

今日中に金沢を経て帰宅される人達を見送ったあと、各自部屋へおさまり温泉でゆつくりと手足をのばす頃、激しい雷雨となる。矢張り日頃の精進の賜物でしょうか。

石川支部の小林支部長以下の顔も揃ったところで、今回の山行の打上げパーティ。岩魚と山菜づくりに熊肉でアクセントをつけて、岩魚の骨酒のまわる頃には食堂でのパーティに劣らぬ盛況となる。

六月十五日 朝から当方のミスで再三出発の時間を繰上げ御迷惑をおかけしたが、二台のマイクロバスで雨の中を白山下まで、そこから大型バスをチャーターし一路金沢へ。十時、無事に金沢駅着、解散。

全国からお集りいただいた皆さんと、こうした思いがけぬ山行の機会を持てましたことを、私達一同、本当に有難く感謝いたしております。(以上、津田文夫記)

参加者 望月達夫、牧野衛、山本朋三郎、北島正八、富田美知子、宗実慶子、桑田結、浅利欣吉、平野明、小原晴子、水野公男、斎藤桂、林稔、岩崎三郎、村井葵、磯部幸則、守田治夫、金井良碩、山口亮、山田哲郎、松本慎太郎、井

関扶、山川力、北林嘉鶴子、福田光子、鼎治紀、山下政一、柳田淳子、石井忠雄、石橋陸夫、千原忠山崎健、松井辰彰、高木碯男、藤井茂雄、高木泰夫、国枝武喜、大槻氏巴、佐藤芳久、佐藤正夫、小西利雄、村田正春、大橋典雄、渡辺一光、平林芳夫、山口政一、山口きくゑ、本郷孝文、元田貞夫、宮後正樹、坂井久光、野村俊男、

●お願いとお知らせ

重ねて「この一本展」のお願い

年次晩餐会にあわせて行なっております恒例の「この一本展」は昨年お休み致しましたが、十五回目になります今年には装いを新たに書物だけにどまらず、書翰、写真、絵画なども含め次の要領で催したいと思えます。ご協力お願い申し上げます。なお、展示品の客観的価値を重んずる意味から、選考は図書委員会に一任願います。一、山に関する蔵書の中から珍本秘本、稀本、署名本を持ち寄る。一、山に関する珍しい写真、並びに絵画を「この一本」と思われるものを持ち寄る。一、「この一本展」は年次晩餐会当日会場に持参いただき展示、会后持ち帰る。一、持参品の「この一本」について簡単な随筆(四〇〇字原稿用紙二枚以内)を添える。

佐竹良彦、柏計雄
なお、石川支部側の参加者は以下の通り。
平岡誠一郎、保坂憲三(上記二名の方々は東京より来られ、金沢から入山)小林雄次郎、亀田与三、増江俊三、灘地信夫、河村真治、若宮昇、岡本明男、北由久、丸山隆、織田伸次、松下竜男、八木沢美好、安藤宣之、上野弥生

ナンド・デヴィ(加藤保男)パミール(原真)主催 日本山岳会東海支部 後援 朝日新聞社 申込み 切手代用で東海支部(〒466名古屋市昭和区鶴舞4-16-7グリーンハイツE-1池沼慧方)まで。
山の文献展示会
国立国会図書館では、次のとおり所蔵資料を主とした山の文献展示会を開催し、一般に公開いたします。

記
名称 山の文献展示会
——江戸期を中心として——
構成 1、山岳信仰と講中登山
2、紀行文・地誌にあらわれた山々
3、山廻り役と見分登山
4、本草学者と採葉登山
5、北辺の探検と登山
6、近代登山の始まり
7、九山文庫(故深山久弥氏旧蔵)
日時 十一月八日(月)～十一月十三日(土) 午前十時～午後五時まで
場所 東京都千代田区永田町1の10の1 地下鉄(丸の内、千代田線)国会議事堂前下車。都バス、京王バス国会議事堂前下車。地下鉄(有楽町線)永田町下車、都バス三宅坂下車。
国立国会図書館六階講堂(入場無料)

一、原稿には「この一本」の書物については書名、著者名、発行所名、発行年月日を、写真・絵画については場所、製作者、製作年月日を記して下さい。
一、原稿の締切りは十一月一日、宛先は日本山岳会図書委員会。
一、出品目録および原稿は印刷して晩餐会の当日参加者に配布する予定です。
今年の晩餐会をより有意義にするために皆様のご協力をお待ちします。(図書委員会)

日本山岳会東海支部講演会
「ヒマラヤ登山隊
三つの記録」

期日 十一月十九日(金)午後六時三十分～九時
場所 愛知県婦人文化会館講堂
会費 五〇〇円
プログラム
講演「本年度のヒマラヤ登山」
記録発表 ジャヌー(小川信之)

会務報告

7月理事会

7月2日午後6時30分、本会ルーム

- ▽出席者 織内、望月各副会長、浜野、高遠、山本健、小倉、山本良、神崎、大森、皆川、黒石、田村俊、橋本、浜口、浅田各理事、太田、飯野各監事、小原、浜野、折井、宮下各評議員
- ▽委任 今西会長、近藤、原、大倉各理事
- ▽議案
 - ・東洋大学ヒマラヤ登山隊推薦状交付願いの件 (浅田)

承認
田村俊理事に日本山岳協会海外担当理事兼任承認の件(浜野)

承認
新ルーム購入プロジェクトの件 (山本健)

承認
本会財政からみて、資金に関して財務委員会で検討、今後プロジェクト・チームに飯野監事等の参加も得て、継続して検討する 了承

▽報告事項
・ナンダ・デヴィ初縦走成功 (宮下)

・日印合同女子隊カメット悪天候のため中断、アビ・ガミン登頂成功 (小倉)

・本会名誉会員日高信六郎氏六月十八日逝去
・白山現地小集会報告 (望月)
・上高地ウエスタン祭報告 (織内)

・越後支部創立30周年記念集会報告 (皆川)

・集会 (神崎)

・6月21日植村氏の報告会 (皆川)

・海外連絡 (田村俊)

・フランス山岳青年集会参加見送り

・婦人懇談会 (黒石)

・ビールパーティー8月28日 (山本良)

・図書 (山本良)

・谷川懇親会報告、「この一本展」再開予定、絵画展2月下旬〜3月初旬予定(於丸善)

・自然保護 (山本良)

7月10日〜11日上高地集会

ルーム日誌 (51年8月)

- 3日(火) カメット委員会
 - 4日(水) 山研委員会
 - 9日(月) 集会委員会
 - 10日(火) ナンダ・デヴィ委員会
 - 13日(金) カメット委員会
 - 16日(月) カメット委員会
 - 17日(火) ドウナギリ壮行会
 - 24日(火) カメット委員会
 - 28日(土) ビールパーティー
 - 30日(月) 集会委員会
 - 31日(火) 雪崩講習会
- 今月の来室者三八二名

会員異動 (51年8月)

支部変更
六二七五 菊地 修身(岩手支部) 退会者

●自然保護情報

各支部の自然保護委員

過日、各支部長を通して各支部在住の自然保護委員の委嘱をお願い致しておりますが、九月一日現在で、十二支部長から十八名の方々を推薦いただきました。

このほかに本部委員会からの委嘱委員二名を加えて、左記二〇名となりました。推薦者のなかった支部は、山梨、岩手、秋田、富山、山陰、福岡、東九州の七支部です。

記

辻井達一(北海道、後藤幹次(山形)、庄司駒男(宮城)、武藤清次(福島)、猪俣信市(越後)、井口謙司、浅輪幸久、中野和郎(以上信濃)、坂下心一(静岡)、尾上昇(東海)、大内幸雄(岐阜)、亀田与三次、力丸茂穂(以上石川)、出口一良、松長晴利(以上関西)、馬場猛、本田誠也、佐藤光俊(以上熊本)、山村正光、田村聡明(以上本部委嘱)。

日本山岳会「穂高宣言」

去る七月十日、自然保護委員会第一回上高地集会において採択された「穂高宣言」の全文は次の通りである。

五四七四 青山 亘(51・8・12)
改名者
六四四八 鷲見 豪志
除籍取消
四八七八 松方 峰雄

りである。

「清冽な梓の溪流と、そこから仰ぎ見る壮嚴な穂高連峰を、我等の先達はこよなく愛し、親しみ、学び、そして尊び、その美しさに心打れたのである。

本会は、明治三十八年の創立以来七〇余年、常に自然保護を重視し、今日もまた我等はこの聖なる近代アルピニズム発祥の地に集いて、偉大な先達の足跡をしのび、その気高い自然保護思想に新たな感銘を覚えるものである。

一昨年国民的合意によって制定せられた「自然保護憲章」によっても明らか如く、……自然をどうとび、自然を愛し、自然に学び、美しい自然、大切な自然を永く子孫に伝えよう……という精神は、今や日本中の美しい自然は日本人共通の財産であるという認識である。

しかし、時代と共に登山人口や観光客は急増し、交通の発達とあいまって、各地の美しい自然景観地は観光地化の一途をたどりつつあり、大勢の人々の持ち込む一握りのゴミが、美しい景観を損わしはじめている。

このことはまことに悲しむべき実情である。我々は「このかけがえない美しい日本の自然」を守るといふ自然保護の原点からの発想に基き、上高地、穂高連峰におけるクリーン・エリアの実現を、さらには日本各地におけるキープ・クリーンの実現を、ここに集いし各位の総意において堅く誓うものである。

右宣言する』

穂高宣言の精神にのっとり、本

岳沢クリーン・エリア計画

オリンピックの
ゴールド・メダル
——登山とオリンピック補遺——

戦時発刊の『山』誌(梓書房)をめくって見たところ、麻生武治さんの「山とオリンピック」(第二

巻第10号)の小論が目にとまった。会報7月号(NO.373)に「山と

オリンピック」を掲載したこともでもあり、読んでみると、大部分は昭和十五年の東京オリンピック開催誘致に成功し、冬期大会の会場として、日光が札幌かを検討したものであった。しかしその冒頭に、麻生さんが見たロサンゼルス大会時の登山ゴールドメダル授

年七月から来年七月までの一年間を通して、奥穂、前穂、岳沢を結ぶ逆三角形の地域を自然保護のモデル地区に設定して、「クリーン・エリア計画」の名の下に徹底したゴミ一掃、ゴミ持ち帰り運動を展開中です。

当地を登山される各位の協力を願ってやみません。

特に、秋から春にかけての積雪期におけるゴミ処理につきましては一層のご協力と指導をお願い致します。

(自然保護委員会)

賞のことが掲載されており、7月号の補足としてお伝えしておく。

『山』は極く寛いだ炉辺叢談誌というのがお題目だそうだからうっかりオリンピックの話なんか持ち出そうものなら、詩人とか絵かきとか、明暮山草の研究に余念もなさそうで存外いろんな方面へ神経質な口や筆の達者な人たちから文句も出るかも知れない」と前置きして、

「どっこい山とオリンピックとは大いに関係が出来て了ったんだから面白い。去る一九三二年ロサンゼルスオリンピック競技最終日、大詰めの幕も下りるといふ直前、ドイツの榮譽を讃えるセレモニーが行われたのであった。その前年、七月三十一日難攻不落とされていたマッターホーンの北壁の登はんをなしたとげたシュミット兄

弟にオリンピック・ゴールドメダルが授与され、満場起立の中にドイツ国歌は奏されたのであった。それをしも子供っぽいオリンピック

●お知らせ

第18回(第三四九回小集会)

登山技術講習会

日本山岳会指導委員会
集委会委員

これから本格的な登山を志す初級の方を対象にした、積雪期登山の基礎技術を中心に、懇親の意味を含めて、初冬の富士山で講習会を行います。要領は下記の通りですので、男女を問わず御参加いただきたい、ご案内申し上げます。宿泊設備の都合で、申込み受付は三十名に限りましてご了承ください(参加者多数の場合先着順とします)。

東京都文京区湯島一の六の一
さくらビル7階
☎03-813-2286(代)

場 所 富士山御庭小屋付近

日 程 十一月九日(火) 午後

六時三〇分参加者説明会 於・

本会ルーム

十一月十六日(火) 午後一時

準備会 於・本会ルーム

十一月二十一日(日) 午前九

時四十分河口湖駅(富士急行線)

集合、五合目まで自動車、午後

トレーニング

ク優勝メダルが何んだ、国歌の吹奏が何んだ、という人は勝手にするがいい。……」というものである。(片山金平)

十一月二十二日(月) パーティ

別トレーニング 夜懇談会

十一月二十三日(火) 午前中

ミーティング 十二時河口湖駅

にて解散

参加費 会員五〇〇円、非会員

六〇〇円(宿泊費、消耗品費、

保険料等、申込み後個人的理由

での解約には、参加費をお返し

しない場合があります。)

なお、原則として三名一組とし

てお申込みください。一名で参加

なさる方は、そのむね記入してく

ださい(申込み書は各自一名ずつ

記入でご提出ください)。

昭和五十一年度

年次晩餐会

日時 昭和五十一年十二月四日

(土) 午後六時

場 所 東京都新宿・京王プラザ

ホテル

昭和三十九年十月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一

利根川商事ビル

発行所 法団 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

(昭三十八六代表)

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

発行所 法団 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

(昭三十八六代表)

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

会費 五〇〇円
会員各位には近く別途ご案内いたしますが、多数ご参加くださいますようお願い致します。

マラソン大会

学生部恒例のマラソン大会を左記の通り行ないます。奮ってご参加ください。

日時 十一月七日(日)

午前九時三十分集合

場 所 皇居 桜田門

内容 個人戦、団体戦(一チーム四名)

ナンド・デヴィ縦走

一九七六

日印ナンド・デヴィ

登山隊仮報告書

写真十葉、ルート図二葉、表紙

共二十四頁。

発行 ナンド・デヴィ委員会。

頒価 一部二百円。

郵送ご希望の方は、誌代に送料

百六十円を添えて、山岳会事務局

へお申込み下さい。

昭和五十一年十月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一

利根川商事ビル

発行所 法団 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

(昭三十八六代表)

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

発行所 法団 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

(昭三十八六代表)

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

発行所 法団 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

(昭三十八六代表)

振替口座東京三一四八二九番

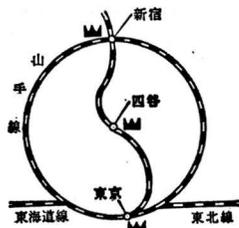
東京都港区赤坂一丁目三番六号

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい
山の店
- 北へ来たたら
山の店
- フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 65664
日本信販加盟店



山友社 たかはし

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



かたるぐンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京都・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京都・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



山の本

新刊

グリンデルヴァルトの 山案内人たち



サミュエル・ブラーヴァン
井手貴夫 訳 A変型判アート
一〇〇頁 定価三、八〇〇円

横有恒氏のアイガー・ミツテルレギー山稜初登攀に参加した著者ブラーヴァンが、日本の近代的登山と深い関わりのあるグリンデルヴァルトのガイドや案内人組合の歴史、組織のなりたち等を語る。山岳史上に残る登攀ルート図やガイドのプロファイルなども随所に紹介し興味がある

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖へA変型判二〇〇頁
定価三、六〇〇円 北海道の利尻岳から屋久島の永田岳まで、日本列島の一五〇に余るさまざまな山と自然の風景が、淡彩の筆でいきいきと描き出されているスケッチ集

低山高蹴

▲神谷恭遺稿と追悼▼

へA五判二五二頁 定価二、九〇〇円
日本山岳会で土曜会の中心メンバーだった神谷さんの遺稿と、登山家として人間としての神谷さんをご遺族並びに親しかった方々が追憶し記し、併せてまとめたものです

かんあおい

山下一夫へA五判三〇三頁 定価三、六〇〇円
『山日記』の高山植物の解説で親しまれた著者が、生涯愛し続けた野の花山の花のスケッチと共に綴った随筆と紀行集

● 出版目録送呈

● お買上、ご注文は最寄り書店でどうぞ!

茗溪堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1 電話03-291-9442 振替東京8-24723